

の唯識學に對する蘊蓄が披瀝されており、努力の程が偲ばれる。著者の方法は、關係諸文獻を殆んど漢譯で讀んでおられるから、純粹にインド學的ではないが、訓詁的な法相宗義學的解釋とは異つた批判的な歴史的方法であるだけに、思想史的にはなほだ有意義であり、唯識學研究に新しい領域を示されたものであるといつてよい。三十頌、二十論、成業論の如き簡潔に思想を整備した難解な論書に對しては、著者の如く背景思想をさぐるといふ歴史的方法を採用することが、なんとしても必要である。この點、本書は唯識學研究に缺くことのできな参考書とならう。

しかし、著者の方法が純粹にインド學的でないだけに、關係諸文獻の取り扱ひについて、識者の間に異論の出づる點もあるのではないかと思ふ。紹介者が一讀した所でも、同感しえない點が二、三にとどまらない。しかしながら、われわれは、本書が著者積年の勞作であり、唯識學研究として現今の學界に貢獻することすこぶる多大なる業績であることに對し甚深の敬意を表したい。(三十年一月刊

A5五三七頁、一〇〇〇圖、東京、青山書院) (安井)

#### ◇ 華嚴教學の研究

坂本 幸男著

著者坂本博士はその三十餘年の歲月を只管華嚴教學の究明に沈潜して來られ、既に雜誌論集にも幾多の業績を發表せられてゐるが、本書は博士の學位請求論文をはじめ十數篇の論文を纏めて公にしたもので二部に分たれる。

##### 第一部 慧苑の華嚴教學の研究

慧苑は賢首大師法藏の高足の弟子としてその俊才を謳はれ、師の歿後、その未完の遺著新經略疏を補つて刊定記を製作した。而るにその製作に當つては師説を刊り自己の新定を加へる點が多かつたので、澄觀は之を背師異流として鋭く攻撃し、後世の學者又すべて痛烈な非難を浴せ、相承の系譜から之を除外してゐる。

著者は曾て國譯一切經中の探玄記を擔當するに當つて多くの章疏を具に比較検討し、その結果慧苑の刊定記が餘りにも不當に低く評價せられてゐるのを痛感し、爾來多年、之が是正を念願して慧苑教學

の究明に努力せられた。この第一部はその研究成果である。その中先づ第一章翻法寺慧苑の傳記 (pp. 5-57) に於てはその經歷、著作、門下にわたつて細く攻究し、その在世年代を六七三—七四三、世壽を約七十歳と推定すると共に、華嚴教學の傳統は事實上、法順—智儼—法藏—慧苑—法說—澄觀と傳承せられてゐることを論證する。次に第二章以下は、慧苑の教學大系が最も組織的に述べられてゐる刊定記初の十門開説を資料として採り上げ、之に依て論が進められる。すなはち第二章慧苑の教學に對する論難とその吟味は十門開説の次第に筆を起して隨疏演義鈔に擧げる刊定記破斥の十種の理由を紹介して澄觀の慧苑に對する論難を概観し、之を吟味批判し、次いで十門の第一教起所因について論を進める。次に第三章華嚴經と三藏二藏十二部經との關係 (pp. 111-148) は第二藏部所攝を第四章諸教判に對する慧苑の批判 (pp. 149-265) は第三顯教差別の三門中、一教、異説と二、辨順違を、第五章慧苑の四種教判論 (pp. 266-300) は顯教差別中の三顯正義を夫々素材として取扱つてゐる。慧苑に對す

る澄觀の非難の主要點は教判論にあるので本書に於てもこの中特に第四章第五章の教判論に重點が置かれてゐるのが見られる。著者はこれら四章にわたる論述に於て先づ所論の中心となる判定記の記述を仔細に吟味してその典據を尋ね、その典據が探玄記搜玄記大乘義章の外、義林章解深密經疏等にも依るを注意し、或ひは之を探玄記・大疏鈔等と比較してその優れた點を明らかにし、ついで判定記の所説に對する澄觀等の論難、更にはそれに附和しての後世學者の非難酷評等を紹介し、最後に此等の論難に對する著者自らの見解を明してそれらの不當性を指摘してゐる。かくの如く判定記の記述を詳しく吟味することに依て、著者は、慧苑がその經典解釋に當つて梵文を參照する等、極めて忠實な且つ理論的な方法をとる、又圓測基法師等の新譯佛教家の學説にも十分留意してゐる等の點に、彼の教學の特質を見出して之を賞揚すると共に彼に對する後世の非難の多くを、澄觀が彼を背師異流として論難したことより生ずる偏見に歸し、その澄觀が慧苑の學説を極めて多く採用してゐる點に深く注意

を留めて、慧苑の學説が再評價せられて彼が華嚴思想史上の正しい地位―法順―智儼―法藏―慧苑―法銑―澄觀といふにおかるべきであると結論してゐる。

終りに、全篇を通して強く感ぜられるのは著者の深く且つ廣い學識とその嚴密な研究態度であつて、一々の論項一々の資料について、その思想系統を探りその由來する所を索め、或ひは印度的資料にまで遡り、或ひは廣く異本等と比較し、乃至一字一句をも忽にしてゐられない。夫故、それ等の考證の中には悠に獨立した一論文として、發表せらるべきものも見られる。かゝるゆるぎなき基盤に立つて今や吾々の眼前には慧苑の教學の眞實の姿が顯にせられた。それは誠に千數百年來、澄觀の背師異流の責難に依て土中深く埋れてゐて古來の學者が見ることをえなかつた華嚴教學史の大きいなる礎石の一つを發掘して白日の下に曝け出したかの趣がある。斯學に對する深い造詣と鋭い批判精神をもつ著者にして初めてかゝる不朽の業績を果遂し得たものであるとの感が深い。

## 第二部 華嚴學の諸問題

これは著者が「研究の途上對決を迫られた種々の基本的問題を折に觸れ攻究し發表した中から十一篇を選び之を三篇に分類して集録せるものでいづれも華嚴教學の研究には貴重な資料である。

第一篇 華嚴聖典成立に關する研究  
(常磐博士還曆記念佛敎論叢)

第二章 華嚴經と攝大乘論佛二十一種の功德(大崎學報九十四號、昭和十四・七)

第三章 十地經論と瑜伽論菩薩地住品との關係

十地經論の科段の切り方が住品に準據せることを論證す。

第二篇 華嚴教學成立に關する研究  
第一章 初期大乘經典に於ける三界唯心に就いて

龍樹の著書に引用せられた三界唯心を説く經文を空門(諸佛要集經等) 影像門(般舟經等) 緣起門(十地經)の三種の唯心説に分類し、龍樹が此三種の唯心説を知つてゐたことを實證する。

第二章 地論學派に於ける心識説

(I) 地論學派の直接の文獻としては、法

上の十地論義疏と慧遠の十地論義記があるが智儼の搜玄記も義記の缺所を補ふものとして用いる。(2)義疏及び義記に十地經論の別本の引用を見出して現傳の菩薩流支等譯十地經論の外にその前翻譯本(恐らくは勒那摩提主譯本)の存在したることを論證す。

第三章 智儼教學に於ける唯識說  
眞諦の系統を引く智儼が玄奘及び護法の唯識說に對して如何なる態度を取つたかを究む。

#### 第四章 新羅義湘の教學

第五章 明慧上人の華嚴思想  
右二章は兩者について略傳著作、教訓論、教理論、修道論に分つて組織的に記述する。

### 第三篇 華嚴教學に於ける二三の問題

第一章 經典解釋の方法論の研究(支那佛敎史學、一・二、昭十二、十一)

第二章 佛敎の本質論(宗教研究新十

三、昭十一、十)

第三章 空觀展開の一斷面(佛敎研究

一ノ四、昭十二、十二)

(三一年三月刊・A5五九八頁・目錄索引二三頁・平樂寺書店發行・二五〇〇圓)(日野)

### ◇ インド思想史

中村 元著

小冊子によくインド思想の全領域が大觀されている。リゲ・ヴェーダからガンジー・タゴール・ゴーンシュに至るまでを手落ちなく手際よく、これだけの分量に纏められた著者の該博な知識と透徹した理解にはただ敬服の外はない。多彩な敘述に少い頁數を適切に配分することについて、著者の深い配意が感ぜられる。一讀してこの書の特徴と思われる點を挙げると、

(1) わが國の既刊のインド哲學史に取扱われていた範圍が、この書では餘程擴大されている。それは特に近代の部分において著しい。例えば、回敎思想のインド的發展、サラスヴァティ・ラーマクリシュナなどの宗教改革運動、右に挙げたガンジー・タゴール・ゴーンシュなど最近の思想家、インドの科學思想などについての論及がそれである。

(2) 思想展開の歴史をたどるにつれてその背景となつた社會狀勢に深い關心を拂つている。それは各章の標題に最も端的にあらわされている。例えば、第二章農村社會の確立とバラモン敎、第三章都市の發展と自由なる思索の出現、第四章國家統一と諸宗教の變動、第五章統一國家崩壞後における諸宗教の變遷、等々。このようなインドの「社會的現實」に對する著者の強い關心は近年著者が諸雜誌に次々と發表された論考の上にも示されているところである。

(3) 參考文獻を詳細に挙げることは先行のインド哲學史の何れにも共通に見られるのであるが、この書では特に最近刊の内外語文獻が多く挙げられてあつて、裨益されるところ多大である。

なお卷末に簡便な年表とかなり詳細な索引が附けられている。

最後に敢て望蜀の言を附加えるならば何といつてもこの書は、あまりに少い分量の中に多くの内容を盛つているため、時に、その敘述がいかに素拙的に過ぎてゐる。著者が十分な餘暇を得て、この書のような構想の上に立つた本格的なイン